

教員養成課程における学生の音楽リテラシーに関する研究 (5) —教員採用試験過去問題と例題から探る—

田崎 教子

(要旨)

本稿は、先稿（田崎,2018,2019,2021,2022）に引き続き、教員養成課程における学生の音楽リテラシーを教員採用試験過去問題と例題を用いて明らかにするものである。

今回は、音楽の認知や再生に必要な実践的能力の下支えとなる音楽の基礎理論、幅広い音楽的知識の側面から学生の音楽のリテラシーを測る。この結果を音楽経験の有無や音楽系科目との関連性から分析、検討する。さらに、問題の内容による傾向を明らかにし、今後の指導に役立てることを目的とした。

(キーワード)

音楽リテラシー、音楽の基礎、歌唱共通教材、教員採用試験（音楽）、小学校教員養成

1. 研究の背景

1.1. 学生の音楽リテラシーに関する問題

筆者はこれまで、教員養成課程における学生の音楽リテラシーに関する研究を継続的に行ってきた。音楽リテラシーとは、狭義では「楽譜を読み書きする能力（久保田,2016）」を指すが、広義では「単に楽譜を読み書きできる能力を指すのではなく、音高感、音程感、リズム感等の音楽的感覚、ならびに音楽の言語である音楽的語彙、さらに聴取力、弁別力、再生力等の能力が複雑に絡み合って獲得されるもの（三村ら,2011）」と捉えられている。そのため、これまで音楽を感覚的に捉える聴取力、弁別力、再生力等に着目し、その力を測ってきた。

しかしその一方で、聴取した音やリズムを音符や休符で正確に記譜する力が不十分だと、聴覚で受け取った音楽的情報を他者に伝える方法を失った状態になり、広義の意味の音楽リテラシーを獲得したとは言い難いことも明らかになってきた（田崎,2018,2019,2021,2022）。教員養成課程における学生は、1年次開講の「音楽科概論」において、音楽リテラシーの基礎知識を身に付ける。その後、2年次開講の「音楽実技」、「教科指導法（音楽）」を履修することにより、音楽リテラシーの知識と技能の両面を修得する。しかし、その後3・4年次に音楽系科目の開講はなく、音楽リテラシーを育成する機

会がない上、1・2年次で学修した内容によって音楽リテラシーがどの程度定着したのかを把握する機会もない。

そこで今回は、教員養成課程で音楽系科目を学修した学生が、教員になる際に必ず受験する「教員採用試験」の問題に着目することにした。教員採用試験の音楽の問題は、試験問題全体からすると決して多くはないが、大学での学修がどの程度定着しているかを測る1つの指標として機能するのではないかと考えた。

教員採用試験の過去問題を活用し、学生の認知主義的学習観の促進を試みている研究には、奥田(2022)がある。この研究では、教員養成課程に在籍する学生を対象者としている点、教員採用試験の過去問題を使用している点、履修科目「音楽概説Ⅰ」との関係性に触れている点、音楽経験の有無による平均点、正答率の違いなどに触れている点など、本稿と共通する部分は多い。しかし、本稿と決定的に違うのは、奥田(2022)が教員採用試験の過去問題を音楽系科目で効果的に活用することにより、認知主義的学習観を促進できるかどうかに関心をあてていることである。

本稿では、採用試験の過去問題や採用試験用の例題の実施によって、どの程度の正答率が得られるのか、あるいはどのような問題につまずきがみられるのか、さらに現在、履修している音楽系科目や音楽経験とどのような関係性があるのかについて探り、学生の音楽リテラシーの把握に努めたい。

1.2. 教員採用試験(音楽)の出題傾向

ここでは、本学の学生が受験する可能性の高い各都道府県に焦点をあて、一都六県(東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、茨城県、群馬県、栃木県)の自治体が実施する小学校教員の教員採用試験のうち、音楽の問題の出題傾向について概観する。

次の表1に2019年から2021年までの3年間の出題傾向を示した。ただし千葉県は、過去3年間、音楽の問題は出題されていないため表には記載していない。音楽の問題の出題がない理由について、千葉県教育委員会に問い合わせたところ、公表していないとの回答であった(2022.10.6.現在)。このように、教員採用試験に音楽の出題がない自治体もあるが、それが直接、音楽リテラシーを獲得する必要性を打ち消すものではないと捉える。教育現場で音楽の指導をするには、音楽的な基礎知識と音楽的感觉を使い、広義の音楽リテラシーを必要とするからである。

表 1. 一都六県の教員採用試験（音楽）の出題傾向

分類	出題事項	東京	茨城	群馬	栃木	神奈川	埼玉
音楽の基礎	音楽記号、楽譜の読み取り、楽器の名称、使い方、鍵盤の位置、旋律の挿入	19 拍、音価、旋 20 旋 21 拍、旋	19 拍、記号	19 音部、音符 21 鍵盤、	19 音符、加線、音名、記号 20 拍、記号、音部、音高 21 音符、音名、音価、記号	19 旋 20 旋 21 速度、旋、プレス	19 旋、鍵盤 20 旋 21 反復記号、鍵盤
日本音楽	鎌倉～江戸 平曲、能楽、三味線、箏、尺八				20 尺八	19 箏	
日本音楽	明治～現在 国歌 滝廉太郎、山田耕作、宮城道雄				20 宮城		19 国歌
西洋音楽	前期ロマン派、後期ロマン派、 国民学派、19 世紀				19 作曲家、編成、構成 21 作曲家、編成、構成		
民謡 民族音楽	日本の民謡、民族音楽 世界の民謡、民族音楽		21 日：民謡				
学習指導 要領	目標、内容、指導計画の作成と 各学年の内容の取扱い		19 目、取 20 目、取 21 目、取		20 目 21 内	19 取 20 目 21 内	19 取 20 取 21 内
歌唱共通 教材 文部省唱歌		19 共通 20 共通 21 共通	19 共通 20 共通 21 共通		21 共通	19 共通 20 共通 21 共通	20 共通
指導法	学習指導要領解説 具体的指導法			19 具 2 20 具 3 21 具 3	19 リ、楽器 21 リ		21 リ
音階、音程 和音、移調 伴奏			20 和音		19 調性、音程、移調 20 調性、和音、音階 21 調性、音程、	19 音階 20 調性	
その他					19・20・21 曲名		

(帝京大学教職センター提供の資料を基に筆者が作成。表中の略語は巻末に示す¹⁾)

左から出題内容の分類、出題事項、各都道府県の順に示した。表中の 19～21 の数字は、2019 年～2021 年を省略して示したものである。各都道府県の出題傾向を概観すると、栃木県の出題範囲が広範囲に及んでおり、問題の難易度も高いのが特徴的である。各年とも音楽の基礎的な問題から日本と西洋の音楽、学習指導要領、歌唱共通教材、リコーダー等の楽器、音楽の専門的な問題まで、広範囲にわたる音楽や音楽教育に関する知識が求められている。また、問題の難易度についても、暗記するだけでは解けない調性や音階の問題が出題されており、応用力を必要とすることがうかがえる。

各都道府県ともに、記号を選択して解答する形式が多い中で、群馬県では、音楽の指導法について問う問題が毎年出題されている点の特徴的である。表中の「具 2」「具 3」は、具体的な指導法を問う問題数を示しており、暗記すれば解答できる問題とは性質が異なる。言い換えれば、この種の問題は、模擬授業や教育実習などの実践的な指導経験を基に導き出す性質のもので、授業の中で音楽と子どもが対峙したときに出てくる具体的な問題を扱っている。例えば 2021 年には、リコーダーの運指の指導法を示し、この指導法の意図を問うもの、鍵盤楽器の鍵盤を併用しながら運指の指導を行うメリットを問うもの、興味をもたせながら反復練習をする方法を問うものなどの問題が出題されている。

その一方で、各都道府県とも共通して出題されている分野は、音楽の基礎、歌唱共通教材（文部省唱歌）、学習指導要領である。この3分野は、小学校の教員として音楽を教えるために必要な基礎知識であるといえよう。

音楽の基礎とは、いわゆる「楽典」と称される音楽の基礎知識を指す。具体例として、音部記号、音符や休符、音名とピアノの鍵盤の位置、記号や音楽用語、拍子、楽器の名称と奏法等が挙げられる。ただ、表1にある「旋」は、旋律を挿入することによって曲を完成させる問題を示し、楽典とはやや質の異なる問題である。表1の分類は、協同教育研究会編（2021,12-13）を参考に作成したため、音楽の基礎にカテゴライズしてあるが、本来は基礎知識を用いて応用的な能力を問う問題である。「旋律の挿入」は、ある曲の一部が空欄になっており、その空欄にどのような旋律（メロディー）が入るのかを問う問題で、東京都、神奈川県、埼玉県で出題されている。これは、教員採用試験（音楽）の出題傾向の特徴の1つでもある。

もう一つの特徴として、音楽教育に関する出題が多いことが挙げられる。具体的には、学習指導要領の目標、内容、指導計画の作成と、内容の取扱い、歌唱共通教材や文部省唱歌、指導法についてなどである。学習指導要領と歌唱共通教材については、東京都、茨城県、栃木県、神奈川県、埼玉県が出題しており、重要事項であることがうかがえる。特に歌唱共通教材は、東京都、神奈川県、茨城県で毎年出題されている。指導していく上で重要事項であることは間違いがないが、それ以上に各都道府県が共通に取り扱う歌唱教材であるがゆえに、問題として出題しやすいという側面も考えられる。

歌唱共通教材は各学年4曲ずつあり、6年を通して全24曲ある。これらの中には、文部省唱歌が17曲、日本の伝統的な歌（わらべうたや日本古謡）が5曲含まれている。これらはいずれも歌唱曲で歌詞がついているが、問題の傾向としては、歌詞を問うものより、旋律の一部を空欄にし、その空欄を埋める問題が頻繁に出題されている。つまり、歌唱共通教材を用いて、音楽の知識を問う問題が多いという傾向がある。

1.3 東京都教員採用試験（音楽）の出題傾向

次に、本学が東京都に位置することから、前述した各都道府県から東京都を取り上げ、教員採用試験（音楽）の出題傾向を探っていくこととする。

表1によれば、東京都の出題傾向（過去3年間）は比較的シンプルで、音楽の基礎と歌唱共通教材から出題されている。過去5年をみても、2018年にソプラノリコーダーの指導法が出題された他は、毎年、歌唱共通教材が出題されている。歌唱共通教材の曲名と出題内容、問題の難易度と出題頻度についてまとめたのが、表2である。

表 2. 東京都教員採用試験（音楽）の出題内容・難易度・出題頻度

年	分野	内容	難易度と出題頻度 (1～5)
2021	歌唱共通教材（夕焼け小焼け）	拍子 1 問 旋律の完成 3 問	難易度 3 頻出度 5
2020	歌唱共通教材（もみじ）	旋律の完成 3 問	難易度 3 頻出度 3
2019	歌唱共通教材（おぼろ月夜）	拍子 1 問 音価 2 問 旋律の完成 1 問	難易度 3 頻出度 5
2018	具体的指導法（リコーダー）	楽器の扱い方 1 問	難易度 3 頻出度 3
2017	歌唱共通教材（夕焼け小焼け）	旋律の完成 4 問	難易度 2 頻出度 3

（『2023 年度版過去問東京都の小学校教諭』2021 を基に筆者が作成）

表 2 から、歌唱共通教材の出題頻度が多く、内容は音楽の基礎的な知識を問うもので、旋律の完成を求める問題が出題されていることがわかる。「旋律の完成」とは、前述した「旋律の挿入」と同義語である。また、解答を導き出して空欄を埋めるのではなく、予めいくつかの選択肢があり、そこから選んで解答する方法をとっている。これによって、知識が曖昧でも消去法で解答を導くことは可能になる。したがって資料に示されている難易度が 2～3 になっていると推察される。なお、この難易度の基準については、上記の資料に基づいて記載しているが詳しい根拠については示されていないため不明である。同様に、頻出度についても対象年度などの詳しい情報は明記されていない。

このように、東京都の場合、出題傾向も解答方法もシンプルでわかりやすく、対策が取りやすいという特徴がある。その一方で、各県の試験問題と比較すると、県によって特徴が異なるため、重複して受験する場合、対策の取り方に工夫が必要になってくるだろう。

1.4 教員養成課程の音楽系科目

次に、本学の教員養成課程の学生が、音楽系科目を通してどのように音楽の知識や技能を獲得していくのかを概観する。本学の音楽系科目は、1 年次に「音楽科概論²」、2 年次に「音楽実技³」、「教科指導法（音楽）⁴」が開講されている。それぞれの科目で何を学ぶのかを図 1 に示す。

本学では、1 年次に「音楽科概論」で音楽の基礎理論を学ぶ。音符や休符の名称からコ

ードネームを使った伴奏法まで、幅広い知識を修得する。大学入学前に受けてきた音楽教育によって、この内容が易しいと感じる学生もいれば、難しいと感じる学生もいる。様々なバックグラウンドの学生を対象に、復習も含めて基礎的な知識を学び直す。

次に、2年次に履修する「音楽実技」では、ピアノと歌の技能を身に付け、歌唱共通教材の弾き歌いができるレベルを目指している。この科目では、歌唱共通教材を取り扱うことから、学生はその存在を知り、曲名や曲調などに触れることになる。また、同じく2年次に履修する「教科指導法（音楽）」では、小学校音楽科の授業づくりに必要な知識と技能を身に付ける。この科目でも、必ず歌唱共通教材を取り扱い、実際に歌ったり指導したりする。加えて、学習指導要領の内容についても触れるため、音楽科指導に関する重要事項を学ぶことになる。

この調査を実施した時点で、2年次には、「音楽実技」と「教科指導法（音楽）」を履修中の学生と、未履修の学生が混在している。前期・後期とも開講されている科目のため、前期に履修している学生は「履修中」、後期に履修予定の学生は「未履修」ということになる。このことが、今回の試験の結果にどのような影響を及ぼしているかについても、明らかにしていきたい。

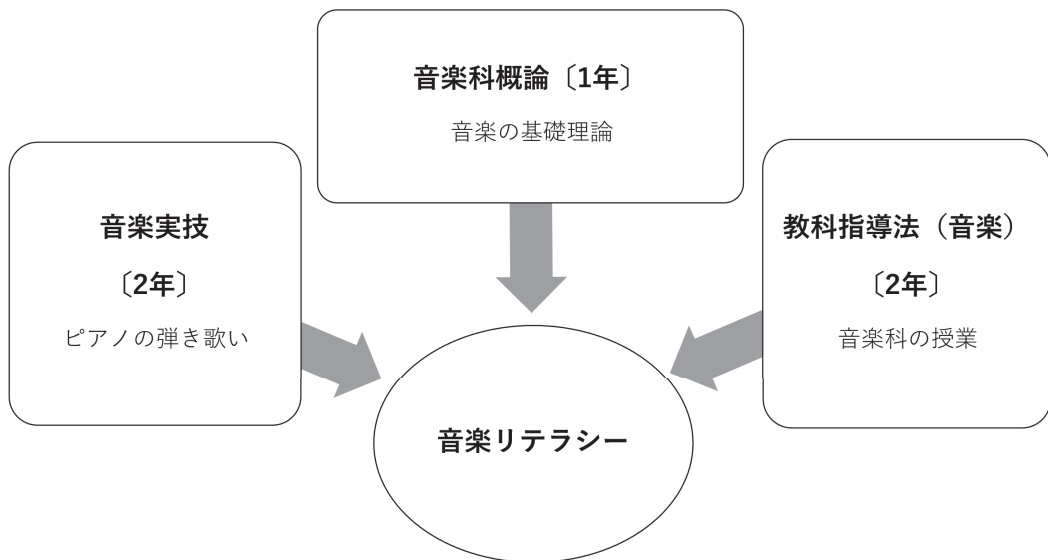


図1. 音楽系科目とその内容

2. 研究目的

以上のような背景を踏まえて、本稿では、東京都の小学校教員採用試験（音楽）の過去問題と採用試験（音楽）用例題を使い、これらを解くことによって、教員養成課程の学生の音楽リテラシーを測る。その結果を音楽経験の有無や音楽系科目との関連、音楽系科目

の特性との関連について検討する。また、問題の分野ごとの傾向を探り、音楽リテラシーの様相を的確に捉える。

さらに、これらを踏まえて、今後音楽系科目の指導にあたり、指導改善に役立てることを目的とする。

3. 研究方法

3.1. 調査期間

2022年開講の「教育研究リテラシーⅠ」のオムニバス授業期間（5～7月）に「音楽における基本的なリテラシーとは」と題する授業内で実施した。

3.2. 調査対象

2022年開講の「教育研究リテラシーⅠ」を受講した教育学部初等教育学科初等教育コース2年生、157名を対象とした。対象者は本授業を受講した学生のみとし、欠席者、未履修者は含まれていない。

3.3. 調査内容

授業内において、次の3点について調査した。

- ①音楽経験に関するアンケート調査
 - ②東京都小学校教員採用試験例題による音楽リテラシーの測定
 - ③東京都小学校教員採用試験過去問題による音楽リテラシーの測定
-
- ①音楽経験におけるアンケート調査は紙面で行い、5つの質問に対し回答を求めた。大学入学以前の学校教育における音楽の授業を除く音楽経験の有無、その施設や団体の種別、演奏経験のある楽器名、楽器の経験年数、現在の音楽系科目の履修状況についてである。
 - ②東京都小学校教員採用試験例題によるテストは、音楽の基礎理論を中心とした問題、50問を20分で解答するよう設定した。解答方法は、択一式と記述式のものがある。
 - ③東京都小学校教員採用試験問題によるテストは、採用試験の過去5年間（2017年～2021年）に出題された問題10問は形を変えずに出題し、10分で解答するよう設定した。解答方法は全て択一式である。

3.4. 調査方法

3.4.1. 音楽経験におけるアンケート調査

音楽経験におけるアンケート調査は、授業の冒頭に口頭で簡潔に説明した後、紙面によって回答するよう求めた。この「音楽経験」をどのように定義づけるかにより、研究結果

に対する考察も異なってくるが、今回は、小・中・高の学校教育における音楽授業以外で経験した音楽経験を「音楽経験」とした。特に学生のほとんどは、小学校、中学校で音楽の授業を受けていると考えられる。この経験を「音楽経験あり」に含めることで、学生の実態が把握しにくくなるとの懸念から、今回は学校教育における音楽授業を除く音楽経験を対象とした。音楽経験の機会としては、音楽教室や個人レッスンなどの習い事、あるいは学校の部活やクラブ、サークルなどの学校関連施設での活動、また学校外で民間の団体や有志の団体での活動等を選択肢に入れた。演奏経験のある楽器には、クラシックに用いられる楽器、ポピュラー音楽に用いられる楽器、伝統音楽や日本音楽に用いられる和楽器等の選択肢を設け回答を求めた。さらに、演奏経験のある楽器の経験年数を回答させた。

加えて、履修科目についての調査は、「音楽実技」、「教科指導法（音楽）」の科目を履修中であるか否かの回答を求めた。

なお、このアンケート調査の結果については、音楽リテラシーに関する研究の一環として実施する旨を伝え、研究結果を学会及び論文などで発表することについて了承を得た上で行った。

3.4.2. 東京都教員採用試験例題（音楽）によるテスト

アンケート調査後、東京都の小学校教員採用試験の例題（以下、例題とする）を用いたテストを実施した。テストは、『2023年度版 参考書 東京都の小学校教諭』（2021）を用い、音楽科の例題から、「音楽科概論」の授業で扱った内容、50問を取捨選択し、1問2点で100点満点になるよう筆者が再構成した。出題範囲と内容は次の通りである。

- ①音符と休符：音符と休符の名称、記号の意味、拍子と音価の関連性、速度記号の意味
- ②リズム：リズムパターン、拍子の基本形、曲名、拍子、拍子関連の知識、伴奏パターン
- ③記号：記号、記号の意味、演奏形態
- ④音階・調性：＃系の調性、♭系の調性、長音階、短音階
- ⑤移調・音程：音程
- ⑥和音：調性と和音記号
- ⑦楽器：木管楽器と金管楽器

この例題によるテストも上記と同様、音楽リテラシーに関する研究の一環であること、そして、この結果を学会や論文などで発表することについて了承を得てから行った。

3.4.3. 東京都小学校採用試験過去問題（音楽）によるテスト

アンケート調査後に、東京都小学校採用試験過去問題（音楽）によるテスト（以下、過去問とする）を実施した。テストは、『2023年度版 過去問 東京都の小学校教諭』

(2021)にある2017年～2021年の5年間に出题された問題をそのまま用い、1問10点とし、10問で100点満点になるよう作成した。既に表2で示したが、出题範囲は歌唱共通教材と具体的指導法で、出题内容は、旋律の完成、拍子、音価、楽器の扱い方についてであった。問題は全て記号で解答するようになっており、万が一解答に困っても、何らかの選択肢を選べるような形式であった。

このテストについても、音楽リテラシーに関する研究の一環であること、またこの結果を学会、論文などで発表する件について了承を得てから行った。

4. 研究結果

4.1. 過去問と例題の得点に関する結果

4.1.1. 総合的な結果

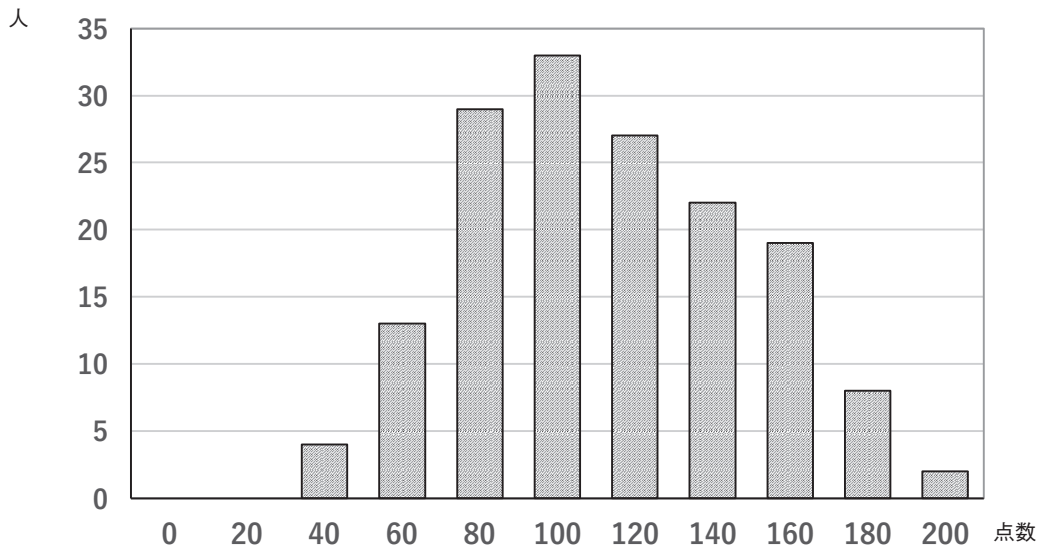


図2. 合計点の得点分布

過去問と例題は各100点で計200点のテストだったが、平均点は104点であった。図2に示したように、全体として大きな山なりのカーブを描いており、100点を中心とした得点分布になっている。問題の大半は既に音楽系科目で学修してきた内容であるにも関わらず、50%程度の正答率が最も多かった。歌唱共通教材に関する知識は、2年次開講の科目で修得する予定のため、現在、履修中の学生と未履修の学生を含む母集団に、そのことが影響しているかどうか確かめる必要がある。以下、いくつかの観点から分析していく。

4.1.2. 過去問と例題の結果

まず、過去問と例題の得点分布を図3、図4に示す。平均点は、図3の過去問が59点で、図4の例題が45点であった。過去問と例題の平均点に14点の開きが出たのは、恐らく解答方法の違いが影響したものと考えられる。前述したように、過去問は全て選択肢から選ぶようになっており、自ら解答が導き出せない場合でも、何らかの選択肢を選んで解答することができる。この点が得点に結びついたのではないかと推測する。その一方で例題は練習問題という性格上、解答を書き込む記述問題が多く、記号そのものを書く問題や、音符や記号を使って音階を書く問題が出題されていた。このような問題は、正確な知識が定着していないと正解に結びつかない。そのため、例題の平均点は50点以下に留まったのではないかと推測される。

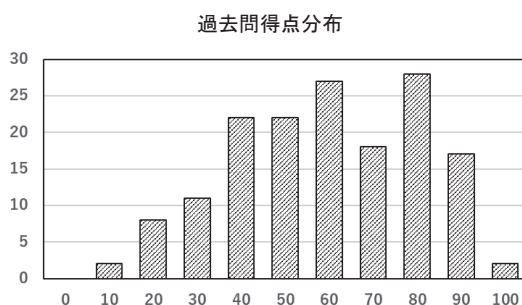


図3. 過去問の得点分布

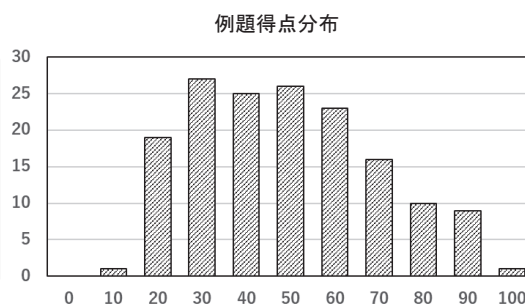


図4. 例題の得点分布

4.1.3. 過去問と例題の相関

次に、過去問と例題の得点には相関関係があるかを検討する。

図5は、過去問の得点を横軸、例題の得点を縦軸にとって、双方の相関関係を表したものである。相関係数が $r = 0.517$ であることから、過去問の得点と例題の得点の間には、中程度の相関関係があると言えるのではないだろうか。ここから、過去問の得点と例題の得点の間には、ある程度関係性があることがわかった。

例題点数

過去問—例題 得点分布

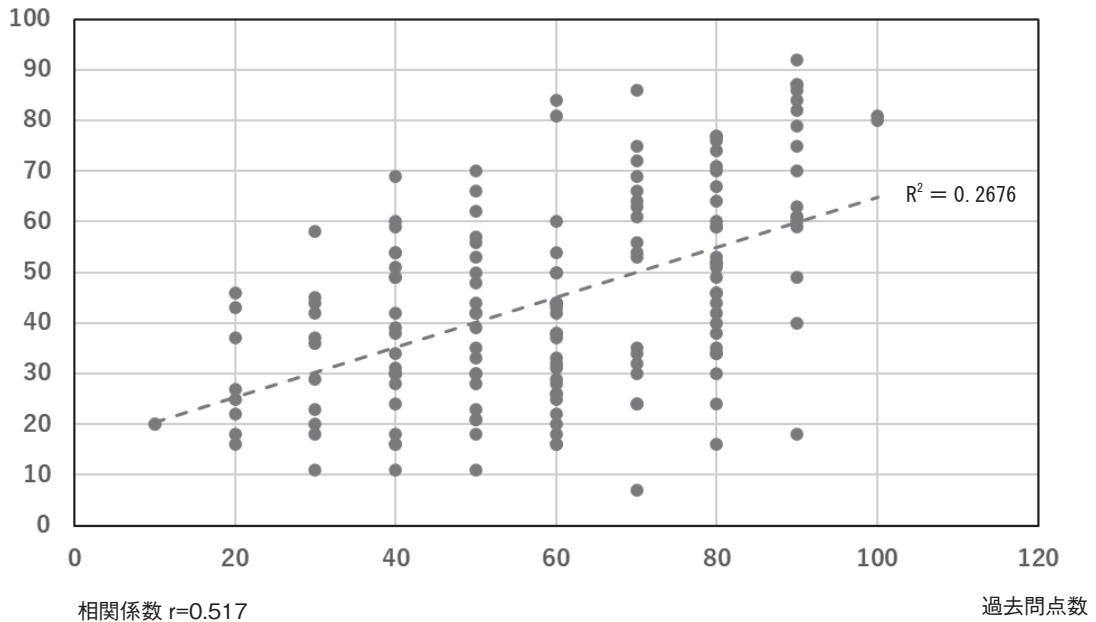


図 5. 過去問と例題の相関

4.2. 音楽経験の有無による結果

大学入学後は、一律に音楽系科目を履修し音楽の基礎を学ぶ環境にあるが、それ以前に受けた音楽教育が、テスト結果に反映されている可能性がある。そのため、テスト前に音楽経験に関するアンケート調査を実施したが、調査の結果、学校教育以外の環境下で音楽教育または音楽活動をした経験のある学生は 70 名、経験のない学生は 86 名、未記入が 1 名であった。つまり 44.5% が経験者、54.7% が未経験者で、半数以上が音楽未経験者であることがわかった。

4.2.1 経験の有無による平均点の比較

音楽経験の有無によって、テスト結果に違いが出るのか検討する。表 3 に示したように、過去問と例題の合計点の平均点が、経験者は 124.8 点であったが、未経験者は 86.9 点であった。約 38 点の差があることがわかり、大学入学以前の音楽教育の重要性を浮き彫りにしている。さらに、過去問、例題のそれぞれの平均点を比較すると、過去問では 16.9 点の差があり、例題ではさらに 21.1 点の差が出ている。

表 3. 経験の有無による平均点の比較

音楽経験	合計点	過去問	例題
経験あり	124.8	68.6	56.2
経験なし	86.9	51.7	35.1

音楽経験者の方が過去問、例題共に平均点が良いのは顕著だが、その傾向は例題に強く出ていることがわかる。この背景には、前述したように自ら記述し解答するという解答方法が影響しているのではないかと考えられる。

また共通点としては、経験の有無に関係なく、過去問の方が例題よりも得点が高いことが挙げられる。この点に関しては、過去問は1問10点であり、選択肢があるということ、例題は50問と問題数が多く、記述式が含まれていることが関係していると思われる。

4.2.2 経験の有無と過去問・例題との相関

音楽経験の有無が過去問・例題の得点にどのように影響しているか、得点分布を参考にして相関関係をみていく。

図6、図7は、音楽経験の有無でそれぞれ過去問・例題の得点を示したものである。図6にある過去問の得点は、経験の有無によってグラフの波形がずれている。音楽経験ありの群は、70～90点に集中し、音楽未経験者の群は40～80点と広範囲に及んでいる。また、図7にある例題の得点も、明らかにグラフの波形がずれている。音楽経験ありの群は70点代に集中し、音楽未経験者の群は20～60点の間を推移している。つまり、音楽経験が例題の得点にも影響を及ぼしている。

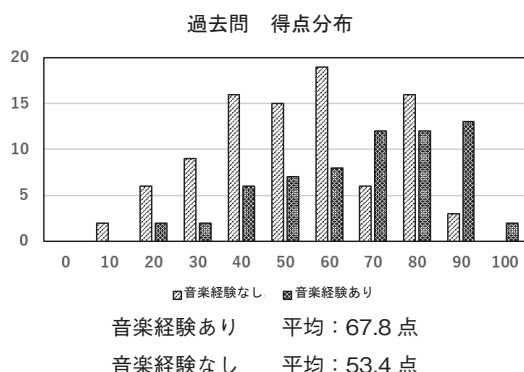


図 6. 経験の有無と過去問の相関

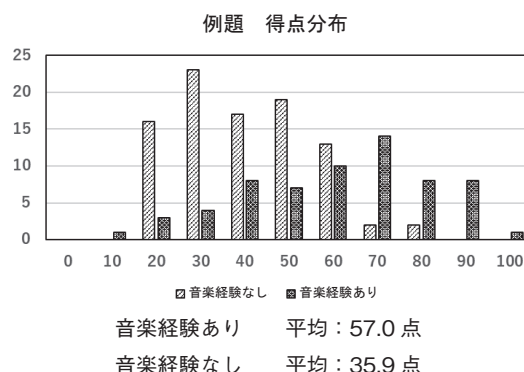


図 7. 経験の有無と例題の相関

表 4. 経験の有無による有意差

		平均	標準偏差	p値
過去問	音楽経験なし	53.4	19.9	1.66x10 ⁻⁵ *
	音楽経験あり	67.8	19.8	
例題	音楽経験なし	35.9	14.4	1.92x10 ⁻¹⁰ *
	音楽経験あり	57.0	20.5	

* p<0.05

さらに、表 4 に示した P 値をみてみると、経験の有無と過去問との相関は、 $p < 0.05$ なので有意差がある結果がでた。さらに経験の有無と例題との相関も、 $p < 0.05$ のため、有意差があるとの結果がでた。このことから、音楽経験がある方が、過去問・例題共に点数を取りやすい傾向があることがわかった。

4.3 音楽系科目とテスト結果との相関

大学入学前の音楽経験が、テスト結果に何らかの影響を及ぼしていることはわかったが、大学入学後に学生が履修する科目「音楽実技」と「教科指導法（音楽）」は、今回のテスト結果とどのような関係にあるのか、その相関を探っていく。今回の調査対象者は、調査時、これらの科目を「履修中」もしくは「未履修」の状態であるため、この科目の履修済みの学生は含まれていない。

4.3.1 音楽系科目による平均点の比較

このテストに関連のある音楽系科目は、1 年次開講の「音楽科概論」と 2 年次開講の「音楽実技」、「教科指導法（音楽）」がある。ただし、1 年次開講の「音楽科概論」は、すでに全員が履修済みのため、比較対象にならない。そこで、「履修中」もしくは「未履修」の 2 科目とテスト結果が、どのような関係性にあるかを平均点によって比較する。

表 5 は、「音楽実技」、「指導法（音楽）」の履修状況を「履修中」、もしくは「未履修」で分け、過去問・例題の平均点を比較したものである。表 4 によると、合計点はいずれの科目も「履修中」の方が高い。「音楽実技」では、履修中と未履修では 12.6 点の差があった。

表 5. 履修科目による平均点の比較

履修科目		合計点	過去問	例題
音楽実技	履修中	110.9	62.7	48.3
音楽実技	未履修	98.3	56.6	41.7
指導法（音楽）	履修中	107.8	60.8	47.0
指導法（音楽）	未履修	100.1	57.8	42.4

また「指導法（音楽）」では、履修中と未履修で合計点に7.7点の差があった。いずれも履修中の学生の方が高得点であった。

さらに、過去問・例題の平均点を比較してみると、過去問では、「音楽実技」履修中が6.1点高く、「指導法（音楽）」履修中が3点高い。「音楽実技」の方が点数に差があるが、これは実際に歌唱共通教材を含む楽譜に触れる機会が多く、譜読みを余儀なくされることから、点数を獲得するための基礎が身につけてきた可能性が考えられる。

また、例題では「音楽実技」履修中が6.6点高く、「指導法（音楽）」履修中が4.6点高い。こちらも同様に「音楽実技」の方が点数に差があるが、授業で毎回楽譜を前にし、音符や休符から音高や音価を読み取ったり、リズムや音程を感じとったりする経験を積むことによって、音楽用語に慣れ、その意味を理解してピアノ演奏に役立てている可能性がある。ただし、「音楽実技」と「教科指導法（音楽）」の履修状況は、次の3パターンに分かれ、「どちらも履修中」「どちらか一方履修中」「どちらも未履修」のいずれかにあてはまる。このことを踏まえて、相関をみていく。

4.3.2 「音楽実技」と過去問・例題との相関

「音楽実技」の科目の履修状況によって、過去問・例題の点数に影響はあるのか、相関関係を探ってみた。図8にあるのは、「音楽実技」と過去問の得点に見られる相関である。

過去問にみる「音楽実技」履修中の群は、60、90点代が最も多いのに対し、未履修の群は、40、80点代が最も多く得点が集中している。両者とも得点群が二極化している点は類似しているが、履修状況による著しい違いはみられない。一方、表5によれば、「音楽実技」の履修状況による有意差は、 $p = 0.073$ のため、有意差はないという結果がでていいる。このことから、「音楽実技」を履修しているか否かは、過去問を解く上でそれほど影響を及ぼしていないとみることができる。その理由として、この科目は現在履修中で、まだ学修の途上にあるという点、得点にバラつきが見られ、科目の履修による効果と断定するのは無理がある点が挙げられる。

一方、例題にみる「音楽実技」履修中の群は、30～70点の幅広い範囲に得点が点在し、未履修の群は20～60点に点在している。両者が重なる部分も多く、最低点と最高点に違いが出ている。また表6によれば、「音楽実技」の履修状況による有意差は、 $p = 0.043$ で有意差があるとの結果が出た。このことから、例題を解く上で音楽実技の履修は少なからず影響しているとみることができる。ただし、「音楽実技」の履修と例題の点数には、わずかな有意差はあるものの、広範囲にわたる得点分布を鑑みると、1つの傾向を見出しにくい。この科目は音楽の知識を使ってピアノの弾き歌いを行うが、その際に使う音楽的知識が例題を解くことに結び付いた可能性も考えられる。

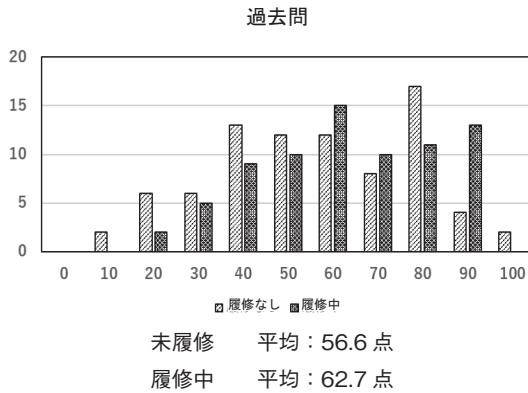


図 8. 音楽実技と過去問の相関

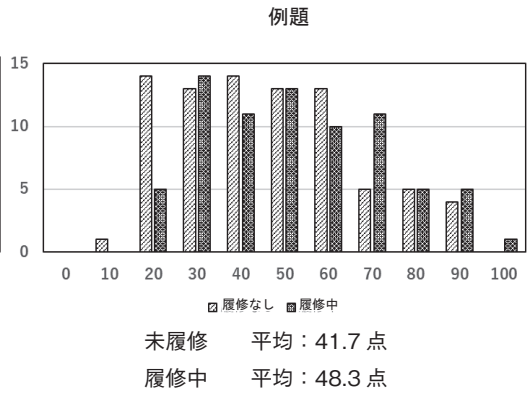


図 9. 音楽実技と例題の相関

表 6. 「音楽実技」による有意差

	音楽実技	平均	標準偏差	p値
過去問	未履修	56.6	22.0	0.073
	履修中	62.7	19.6	
例題	未履修	41.7	20.3	0.043*
	履修中	48.3	19.7	

* p<0.05

4.3.3 「指導法（音楽）」と過去問・例題との相関

次に、「指導法（音楽）」の科目の履修状況により、過去問・例題の点数に影響はあるのか相関関係をみる。

図 10 にあるのは、「指導法（音楽）」の履修状況と過去問の得点にみる相関である。過去問にみる「指導法（音楽）」履修中の群は、60、80 点代が 15 人以上おり、この得点群が比較的多い。一方、未履修の群は、40～90 点の得点に幅広く点在している。平均点の差も 3.2 点でそれ程大きくないことから、双方に違いはほとんどみられない。また表 7 によれば、P 値は 0.38 となっており、有意差は見られなかった。このことから、「指導法（音楽）」の履修状況と過去問との間に相関関係はないといえる。

図 11 にあるのは、「指導法（音楽）」の履修状況と例題の得点との相関である。例題にみる「指導法（音楽）」履修中の群は、50 点代が 15 人以上で最も多く、山なりのカーブができています。一方、未履修の群は、20～60 点代の得点獲得者が 10 人前後おり、なだらかなカーブになっている。平均点の差は 4.6 点と過去問よりは開いているが、双方に大きな違いは見られない。加えて、表 7 によれば P 値は P=0.16 であることから、「指導法（音楽）」の履修状況と例題の間に有意差はないという結果がでた。このことから、「指導法（音楽）」と例題との相関関係はないとの結果になった。その理由として、この科目が

履修途上にあること、授業づくりを中心の内容のため、直接的に音楽の知識を学修する機会が少ないことなどが考えられる。

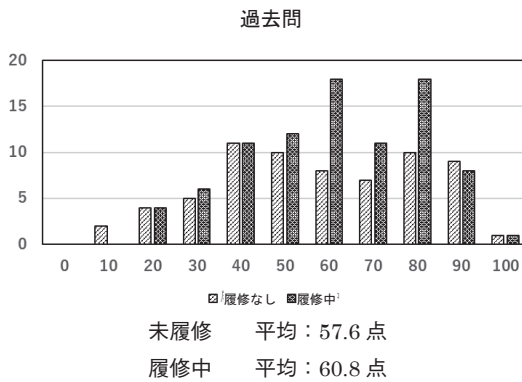


図 10. 指導法と過去問の相関

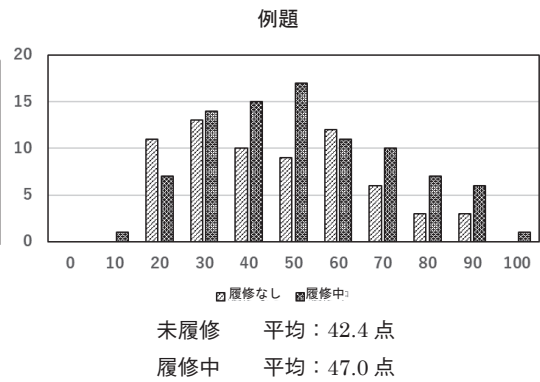


図 11. 指導法と例題の相関

表 7. 「指導法」による有意差

	指導法	平均	標準偏差	p値
過去問	未履修	57.8	23.0	0.38
	履修中	60.8	19.7	
例題	未履修	42.4	19.9	0.16
	履修中	47.0	20.2	

4.4. 問題群の内容による結果

これまで、問題全体を概観してきたが、ここではさらに、問題の内容の違いによる正答率の差に着目する。過去問の問題内容と配点は、A. 音価 (10点)、B. 拍子 (20点)、C. 旋律の完成 (60点)、D. 楽器の扱い方 (10点) である。このカテゴリーにしたがって正答率を比較する。

また例題の問題内容と配点は、①音楽の基礎 (70点)、②音楽の応用 (28点)、③楽器 (2点) となっており、このカテゴリーにしたがって正答率を比較する。

4.4.1. 過去問の問題群の比較 (A. 音価・B. 拍子・C. 旋律の完成・D. 楽器)

過去問に出題されている A. 音価は、強起と弱起について理解しているかを問う問題である。単に音符の長さを問うものではなく、弱起の曲であることを考慮して解答を導かなくてはならない問題である。そのことに気づかず解答している答案が多かった。B. 拍子は、2～3の選択肢から選ぶようになっており、4分音符を基本とする拍子の中から選択するため、比較的易しい問題だといえよう。C. 旋律の完成は、この曲目と旋律を知っていることが望ましいが、歌唱共通教材の知識と実際の音楽がリンクしていれば、比較的易しい

問題だといえる。D. 楽器は、指導法（音楽）の時間に扱うもので、主体的に参加していれば解ける問題である。

下記にそれぞれの正答率を示す。

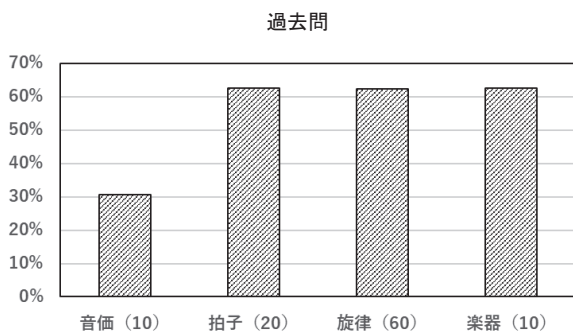


図 12. 過去問の各問題群の正答率

図 12 にあるように、音価の正答率が 31% と極端に低いほかは、拍子が 63%、旋律が 62%、楽器が 63% で、どの問題も 6 割が正答していることがわかる。音価の問題は、前述した通り、弱起の曲だということがわからないと正解しにくい問題だったことが要因ではないかと推察する。

4.4.2. 例題の問題群の比較 (①音楽の基礎、②音楽の応用、③楽器)

例題に出題されている問題群①音楽の基礎は、音符と休符、拍子やリズム、記号等の問題が含まれる。②音楽の応用には、音階、移調、和音、音程等の問題が含まれる。③楽器には、木管楽器と金管楽器の問題が含まれる。①、②とも 1 年次の「音楽科概論」で扱った内容であるが、③は授業内で扱っていない内容である。比較的間違えやすい問題で、確実な知識が要求される問題であった。下記に正答率を示す。

図 13 にあるように、①の正答率が最も良く、53%であった。①は問題数も多く、単純に比較はできないが、①は基礎的な内容が多く、音楽の基礎については約半数が理解していると捉えられる。その一方で、②の正答率は 25% と低い。ここに含まれる内容で、音楽の応用的知識を求められるため、正答率に影響を与えた可能性も考えられる。③は間違えやすい問題ではあるが、選択肢があり消去法で解答が導き出せることもあり、35%の正答率であった。

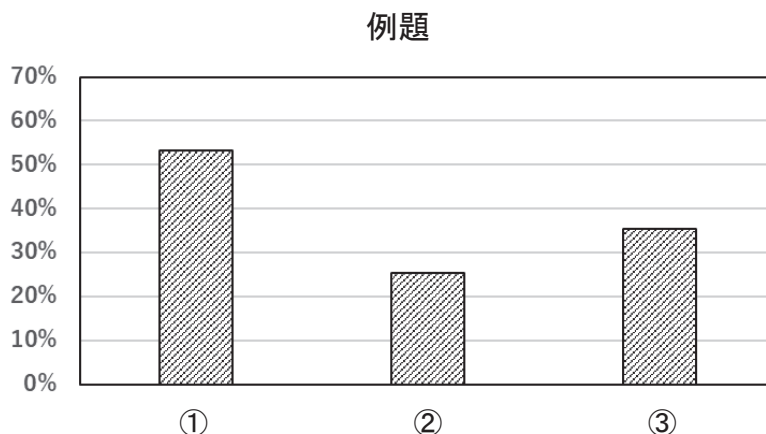


図 13. 例題の各問題群の正答率

4.4.3. 過去問と例題の問題群との相関

過去問、例題の各問題群の正答率をみてきたが、過去問では、音価以外は同様の正答率であった。また、例題では音楽の応用に関する問題群の正答率が低かった。同じような系統の問題同士には相関があるのかどうか、調べてみることにする。

1点目は、過去問（A. 音価 + B. 拍子）と例題（①音楽の基礎）との相関である。2点目は、過去問（C. 旋律の完成）と例題（②音楽の応用）との相関である。この点はそれぞれ似た性格をもっており、1点目はいずれも音楽の基礎的な知識を問う問題である。また2点目は、音楽の応用的な知識を問う問題であることから、それぞれ相関があるかどうかをみる。なお、楽器に関する問題群は、問題数が少ないため実施しないこととする。

音価 + 拍子の点数

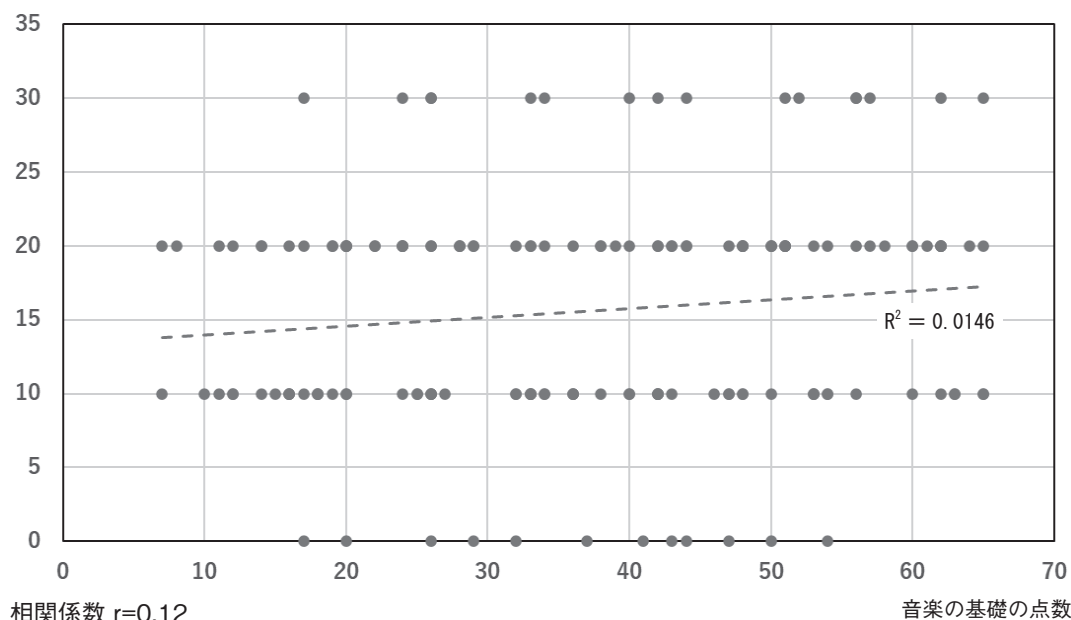


図 14. A. 音価 + B. 拍子と①音楽の基礎との相関

図 14 に示したのは、「A. 音価 + B. 拍子」の点数と「①音楽の基礎」の点数の相関である。相関指数は $r = 0.12$ であり、ほとんど相関関係がないことがわかった。問題内容は、両者とも音楽の基礎を問うものであったが、解答方法や問題の質が異なる点を考慮すれば、相関関係がないことは当然の結果ともいえよう。つまり、過去問における音価と拍子の問題は、問題の意味や意図を理解していなくても正解を導き出せるが、例題における音楽の基礎では、問題の意味や意図を理解した上で、記述による解答が求められるため、知識が曖昧だと正解には結びつかなかったと推察できる。実際に①音楽の基礎の解答例では、誤字や脱字、表記のミスなどから点数に結びつかない解答も多く見られた。つまり、何とな

くではなく、確実に記憶していることが求められており、既にある知識が直接点数に反映されていなかった原因の一つかもしれない。

図 15 に示したのは、「C. 旋律の完成」の点数と、「②音楽の応用」の点数の相関である。相関指数は $r = 0.48$ であり、中程度の相関関係がみられた。「C. 旋律の完成」に関する問題は歌唱共通教材からの出題で、曲の前後の脈絡から空欄に入る旋律を選択するものが多い。曲を知っているか否かで正答率は変わってくるが、音楽の基礎的・応用的な知識を集結させ、的確に判断する能力が求められている。そういう意味で、「②音楽の応用」の点数との相関関係がみられたことは、当然の結果ともいえよう。そのことと関連して、図 15 の左上に示したエリアに得点分布が見られないのも特徴的である。「C. 旋律の完成」の点数が高くても、「②音楽の応用」の点数が 0 点である場合もあるのに対し、「②音楽の応用」の点数が 20 点以上だと、「旋律の完成」は全員が 50 点以上を獲得している。つまり、「旋律の完成」に正答することは、選択肢や解答方法に助けられて、ある程度安易だが、「②音楽の応用」に正答することは、音楽の応用的な知識を正確に身につけていないと難しいことを示している。言い換えれば、音楽の応用的な知識を獲得していれば、採用試験の「C. 旋律の完成」は正答する確率が高くなるといえよう。

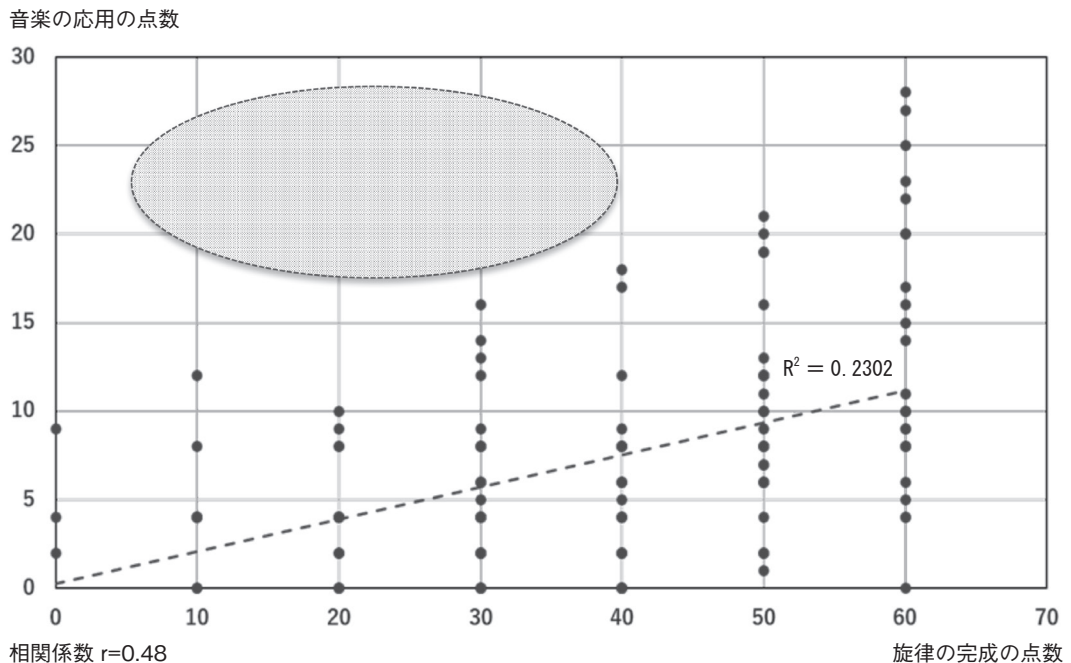


図 15. C. 旋律の完成と②音楽の応用との相関

5. 考察とまとめ

5.1. 採用試験過去問（音楽）と採用試験例題（音楽）にみる音楽リテラシー

本稿では、東京都小学校採用試験（音楽）の過去問（2017～2021年）と東京都小学校採用試験例題（音楽）を解くことにより、教員養成課程における学生の音楽リテラシーを測定した。

その結果、合計点は50%程度の正答率となり、平均点は過去問が59点、例題が45点であった。また過去問と例題の間には中程度の相関関係がみられ、例題と過去問の各得点数は、ある程度連動しているということがわかった。ただし、過去問のような択一式の解答方法では、教員養成課程の学生における音楽リテラシーを正確に導き出すのは難しいこともわかった。加えて、例題のような記述式の解答方法は、音楽的知識の理解度をある程度明確に測ることが可能だということもわかった。

音楽の基礎理論、幅広い音楽的知識という側面からみると、2年次における学生の音楽リテラシーは、十分に備わっているとは言い難い結果になった。また、4年次に受験予定の採用試験を想定した場合の音楽リテラシーという面でも、十分に備わっているとは言い難い状況が明らかとなった。

今後、学生が広義の音楽リテラシーを獲得していくためには、採用試験対策とは別に、確実な解答が導けるよう記述式の練習問題をこなし、日頃から音楽の用語や記号に慣れておく必要がある。また一方で、採用試験対策としては、各自治体によって問題の出題傾向が異なるため、受験する自治体の特色を知り、それに対応した対策を講じるが必要となるだろう。東京都に限定していえば、歌唱共通教材に関連する知識は必須であり、あらゆる角度からの出題を想定して、基礎知識を蓄えていくことが求められる。

5.2. 音楽経験と過去問・例題との関連性

また、音楽経験を問うアンケート調査とテスト結果との関連性については、次のことがいえる。

音楽経験ありとなしでは、2つのテストの合計点に38点の差が出た。さらに過去問では約17点差、例題では約21点の差があった。これによって、大学前に受けた音楽教育が如何に重要であるかが浮き彫りになった。また、過去問より例題の方に大きな点差がでた原因としては、例題は記述式の解答方法が多かったこと、難易度の高い問題が含まれていたこと等があり、確実な知識が定着しているか否かが関係していたと思われる。

今回の調査では、「音楽経験」を小・中・高における音楽授業以外の音楽経験としたため、多岐にわたるジャンルやそれぞれの音楽的環境による違いについては考察することができなかった。大学入学前の音楽経験の内容の違いについては、機会を改め考察していきたい。

大学入学前に受けてきた音楽経験を塗り変えることはできないが、音楽経験者と未経験

者の差を埋めるための方策を練る必要がある。今後は、大学入学後に音楽の基礎から徹底的に復習し、繰り返し学修することにより、知識の定着を図ることが重要である。

5.3. 音楽系科目と過去問・例題の関係性

調査時に学生が履修中だった「音楽実技」と「教科指導法（音楽）」の音楽系科目が、2つのテスト結果とどのような関係性にあるか調べてみた。その結果、どちらも履修中の学生の方が高得点であった。「音楽実技」は履修中と未履修の間に12.6点の差があった。

また、「指導法（音楽）」は履修中と未履修の間に7.7点の差があった。このように、履修しているか否かが点数に表れていた。

「音楽実技」と過去問との間に有意差はなく、相関関係はみられなかったが、例題との間にわずかに有意差がみられた。このことから、ピアノの基礎技能と弾き歌いを学ぶ「音楽実技」の授業では、少なからず音楽的知識の蓄積が進んでいるとみられる。

また、「指導法（音楽）」と過去問、例題との間には有意差がなく、相関関係はみられなかった。この理由として、この科目が履修途上にあること、直接的に音楽的知識を学修する機会が少ないことが考えられる。したがって、音楽系科目と2つのテストの関係性は、履修を終えた後、再検討する余地があるだろう。

また、音楽系科目を指導する側は、科目を通して学生の音楽リテラシーが蓄積していくようなカリキュラムの再考が望まれる。

5.4 過去問・例題の問題内容にみる音楽リテラシー

最後に、過去問・例題の問題内容に着目し、それぞれの問題群ごとに正答率を比較した。その結果、過去問のA.音価に関する問題の正答率が極端に低いことが明らかになった。これは、単なる知識の記憶だけでなく、知識を応用して解答する問題だったことが起因していると思われる。また、例題の②音楽の応用に関する正答率も低いことが明らかになった。大学入学後に1年次の「音楽科概論」の科目で扱った内容であるが、知識の定着に結びついていないことがうかがえる。

したがって今後は、音楽の応用的な知識を重点的に復習する機会を増やし、知識の定着を図るよう努めたい。それは、音楽の応用的な知識を獲得することにより、汎用性の高い知識となり、どんな問題に対しても対応し得ることがわかったからである。さらに、過去問では、「問題を解いて得点すること」と、「音楽の基礎、音楽の応用的知識を理解すること」が必ずしもイコールにならない点が導き出された。音楽的知識が学生の音楽リテラシーとして機能するには、どのような形式の問題でも得点できるようになることが求められるため、確実な知識の定着を目指していきたい。

注)

1. 各都道府県の欄にある 19、20、21 は、それぞれ 2019 年、2020 年、2021 年を示している。それ以外の用語の略語については以下の通りである。

〔略語一覧〕

略語	略語の意味	略語	略語の意味
拍	拍	加線	加線
音価	音価	音名	音名
旋律	旋律	記号	音楽に関する記号
記号	記号	音高	音高
音部	音部記号	速度	速度
音符	音符	ブレス	ブレス
鍵盤	鍵盤楽器に関すること	反復記号	反復記号
尺八	尺八に関すること	宮城	宮城道雄に関すること
箏	箏に関すること	作曲者	作曲した者に関すること
国歌	国歌に関すること	編成	ある曲の編成に関すること
日：民謡	日本の民謡に関すること	構成	ある曲の構成に関すること
目	音楽科の指導目的について	リ	ソプラノリコーダーについて
取	音楽科の指導内容の取扱い	楽器	楽器について
内	音楽科の指導内容について	和音	和音
共通	歌唱共通教材に関すること	調性	調性
具	音楽の具体的な指導方法	音程	音程
曲名	ある曲の曲名について		

2. 「音楽科概論」は、小学校教諭 1 種免許状を取得するために履修しなければならない必修科目である。
3. 「音楽実技」は、小学校教諭 1 種免許状を取得するために履修しなければならない必修科目である。
4. 「教科指導法（音楽）」は、小学校教諭 1 種免許状を取得するために履修しなければならない必修科目である。

6. 参考文献

- 奥田順也（2022）「教職課程学生を対象とする『教員採用試験の過去問題』を活用した『認知主義的学習観』の促進の試み—『音楽概説Ⅰ』での実践報告—」『白鷗大学教育学部論集』16（1） 379-410
- 衣川久美子・山崎和子・由井敦子（2016）「幼稚園・保育所（園）・小学校の採用試験における音楽に関する出題傾向—総合子ども学科 2011 年～2014 年の求人票の経年分析と就職状況—」『甲南女子大学研究紀要第 52 号人間科学編』59-77
- 協同教育研究会編（2021）『2023 年度版 参考書 東京都の小学校教諭』協同出版
- 協同教育研究会編（2021）『2023 年度版 過去問 東京都の小学校教諭』協同出版
- 久保田慶一（2016）『音楽の文章セミナー プログラム・ノートから論文まで』改訂版 音楽之友社

帝京大学教職センター提供資料：全国採用試験問題（2019～2021）

帝京大学初等教育研究会（2020）「小学校音楽科の学びの土台」『小学校教師の専門性育成』38-43

高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一編（2006）『研究法ハンドブック』初版第9版 ナカニシヤ出版

田崎教子（2018）「教員養成課程における学生の音楽リテラシーに関する研究」『帝京大学高等教育開発センターフォーラム』Vol.5 1-18

田崎教子（2019）「教員養成課程における学生の音楽リテラシーに関する研究（2）—和音弁別能力の測定を通して—」『帝京大学高等教育開発センターフォーラム』Vol.7 15-31

田崎教子（2021）「教員養成課程における学生の音楽リテラシーに関する研究（3）—リズム聴取力の測定を通して—」『帝京大学高等教育開発センターフォーラム』Vol.8 15-33

田崎教子（2022）「教員養成課程における学生の音楽リテラシーに関する研究（4）—音高弁別力・音高再生力の測定を通して—」『帝京大学高等教育開発センターフォーラム』Vol.9 1-20

三村真弓・伊藤真・大橋美代子・近藤知美・福田秀範・向井さゆり・神野正喜・松田道枝・川村恭子（2011）「音楽リテラシー育成のための基礎的研究（3）—サイレント・シンキングに着目して—」『広島大学学部・附属学校協同研究機構研究紀要』第39号、pp147-152